羽衣

サカシ
うやうまは老ゐ多漢國陛上乃
前乃もゝくゝ梅も我花子と申
上﨟を持参りさそくゝう通し
春乃法教よるこ吉田のか将殿に
やゝ母ゝ中人乃東へ法下りしより
此寄に住こまわ作て候む子と
源な佳楽るこのゝ人く派ゝ雇をえ

暮てゆかしよるを毛子(?)がに
はへ里よりかよ出る子なくん
かとまは人我よひ出し遊出を
りやと思ひはいはい小花子今月
よわの一
しん是まハりなひんぼし
三テ下
へとらくはかへも出(?)出ろん
一 二 二 一 一 二 三 二 一 一 一 一
実やかよわもそな美(?)世出(?)いうひ

一 、 一 一 一 一 一 一 一 一 二 一 一
那(?)のしらぶかし志賀(?)河(?)好(?)乃
三 、 一 、 二 、 、 、 十 二 二 一
流衰かうより老(?)我(?)方(?)迷ふ
こ 一 、 、 、 、 、 三 上青 、 二 一
りゐもしりてぬまされ野上落
二 二 二 二 二 二 三 一 一 一 一 一
里をまし出でつくゞ江路なまさし
一 一 二 二 下 一 上九 一 一 下 二 二
りまく人にお神しよわ農(?)稲(?)乃露
二 、 一 一 一 一 一 八九 下 一 一 三
ゞまきえぬ男をはしらかなく
次第
一 一 一 一 一 一 一 下 一 八九
へ孑(?)鈿(?)るそ名残冨士乃招(?)なゞく

行て我に語しハ吉田乃
少将とハ成るなる梅も二月
色よし春乃ハ東にまよひや猿
しるし成りへ実ばと都の上りん
朝夕露とむかふ小こゝろ出てつく
忘りし雁小秋風乃声も川の
関路より又立ちへ夕桜木山

色かみ乃ニ團扇上落葉に寫す
くわへハまた作りなが篇留
思ひてや扇満團扇上の寫すてハ
浅所よ班女と明し女に談し
手づから涼すゞしさ此扇をなり
又ひとへ班女乃おもと言ふ中宮
行へハ長とも知か成るのいて

じゝ兵氏伝よハ法へなだく由申しは
梅兆宮なる事那のしなぞ姫女
海王来る事ありし宗都へ決ての
時尼中上将らへと承さるゝ中付
らへ萬召抱もなく我に弟てん
我宿敵乃子母まハゝ秋より
けくよ乳ハ条しみけるゆきん

後三十七上
皆て策らへ　我月野乃雲居を
二二二、、、一一一一一一一一
分てし生出く隔草展りてからよ
一、二一一一一一、詞
見てし―君のもよしなかば人は
上九一
二二、、一一下二、一一一一一一
別夜の月我重月は極迄ん我よの我
一、一一一一一一一一、、詞
秋りき乃便なりてハ移りわを
一一一一一一一一、、詞
しりける人もなしゞ夕暮乃雲ちら
下九一、、二二一
後を小鳥我おりひうた弥空母

おくり神出て男をいさめしに

かくて其後神や佛もあはれみて

おもふ事成けへ叶ハず是柄

たゝまはしめ帝孫や三熊の

此神ハ夫婦男女孫のいうひを

まもりむすぶ縁のひおりまは

此神ハ不動尊をはなれぬ誓乃

なりふ亜文禮上東蘇しひは

つめかりはいまさきゝちにゆ皇

人ー積ひうう思ひそめし

意そのしめし哀人ゝ縁や実や

新里ほしれを洗川よ逢きし比

扱のいひ恵人をことやさきは

人心ほしくなかぬ濁江乃ひゝきのえ

影まて神ともさ是非ハぬえ
理りや兎にも角にも人さまぬ
思乃露の　置処ハなき閨まし
男子り恋心うき味のさか
りなひなはつく新しひとえも
禰や當しき我か真如月見
くもし　城ぎつて顔へし人心

夜乃霜気なをさらしぼらミあかや
ともほまハ　猶同一夜といの侍
あわくりに狂女はとそ
と日ハくあえぬうおもろう
くあひらへ　うたて屋か声ま
御遊路よとさいがはらぬ無精吃
みえ隠れさ風の後庭一葉も

下ウ
ちはなゝが道心直なる心を狂へ心
何あは人くるゝ風狂ーゝふ
嫁の葉乃心もたにこゝ神変なる
ぢやうの風しや狂へとなく何ある
さらゝふかひうよ
ワキ詞
掛例乃班女が
扇はいかゞ候ふなやゝりぬを
シテ詞
班女とよひ給ふうやしく

うれしもうつむ人乃形見なる扇手に
ゆきてもかきなきりも我袖乃露
上ウ
かはゝらゝまでも思ひうつ流ふ
班女か閨なる内の嫁乃扇の色
嫂王乃意落上よい秋なる翠簾
下同
夜り流る行つきゝ秋乃白露と
けまりさい異部隊の床流しや

獨は寝ざらし──枕しして草乃
月も浮雲　月重山に隠ぬれば
扇をあげて是をたとへ
巾上にかぬま度雲をあつめて
げにや在あり──世　夕の嵐影乃雲
ば秋の思の妻なくぬさをしき
我等も我猿乃葉いろう隠山よ

響つくはなるもとしてまう秋を
ものあはしせめて草露月よりも
志りし枕子残しひしてまさき獨
旅よ改めぬやそや　翠帳紅閨に
枕ならべし床乃上列し──衾の
よひしも同穴の語らひもなし
ばのしう秋も間──よ致敷のみを

、、、、、、、、一二ニ一、、、
さゝやとも悲しく流きの草葉の露の
、、、二二一一一一中一一
悔めは賊連理のかこひそれ
、、一九二下二二二一一、、、
縁山宮乃秋葉ハ涙の時雨へて
ヒ一二、、、、、、、二
と於世ときもすゝ夢まよひても
二二、、、一二二、、、、
我妻乃縁よりわ先になかれ悲し
二、二、二一一二二一、
夕の数ハ重積とあたし言葉が
二、ミ二一一一、二一
人心移めて来ぬ秋ハ横雲とも

一二、、、、、一一八九一一
襴干ふさはしてずなし寒
下二、二二一一八九二下二二二八九二
定よもしの世袖いかの音乃嫁風嵐
二二一下、二、二一、八九一一、、
山下風野分もあ嵐松たちのを
下一一二二一一二二、
なくちは数まゝゆりますかは人よりわ寒
二二二、、二、、上、一一
青海なく流きりきし＼さめゆく
一二一一二三一一一一一上一
もみ紅見乃扇手にかまして風乃
二三二二二二二一一二二二
便と思へはなも字に寄付宮嵐

秋風ひやゝかに成落て園の雲ら
あふぎも要なき我身をきくも
ほそしくて蝶風にあまよし
屋思へ天見も実意はふ成へし
思すゝ人なまぜえとも更存ともも人
なも恨むまし作思ひ私ぬ方の
祖母思ひ巻て独居の姫也

ゑやうきしき 鶴まかゝる
月我隠しへのとゝろにおする
ゐの脊 とゆ袖も三重のゆきの
更いろきぬ衣 妻のゆきさらし
の砧ひゞく音の月は小重つ里
嵐は吹きとし おかの葉落
うよとの便も聞のみて 鹿の音

虫乃音まれ〳〵荻葉のそよめる
よしなや　形見乃扇より
猶うらおもてある物ハ人心なり
くふうやあふぎとは空ごとや
何りん逢ふものなく
いまは旅ゝこそあ狂女り持ち候
扇のうき見度由申しへ　いかに班
女があ持ち候夕顔乃うちよるぞ狂女乃
持ちたる扇候らへし一ツ扇との候
今まではずうと参らきし給ひ候
これは人乃見るなまゞ男を
り扇とりてもちら扇なからしこ
ぞうさうるいあうなまゞ先
扇くのぞ忘ゝひまもあるまし

物なと思へせきはめ文ぞみ
こゝちぎる折ゝに扇とる袖も
惜我物を人ま見しける事あし
こりすまも忘形見乃言葉を
いはで乃森の下つくしにて
いてしぬう恨ともつらくこしう
志つゝめ此扇ふる事梅河の名

うらし夕暮の月哉いさきは扇乃
鴫乃蒲りるまゝ司新ふ八はの浮名
なるゝしきはかなよりしや白露乃
ぞ那ら壁上乃旅のきし野養嫁ハ
いりなかむ野上ゆかうえつく
東路の末の松山渡らして帰る
さうし人やそし
末乃松山立

浪乃ばゝ沖せ繁るゝ ＼ 形見がら
扇うるゝふも ＼ 男小湯持ー
此方の前 ＼ 与兵衛〳〵 ＼ 扇出
きは折節たうれ身がほらく
見ゝ宮ま夕郷乃花亜ゝふ扇
哉上え雁見てなりしうく名てゞ哉
綾乃扇が流滝騒よまにゞう飛うと
上つる秋しうゆふ浪扇のもうま浪
来さ乃ゝう娘狩乃中港なるさゝ字
かまく